

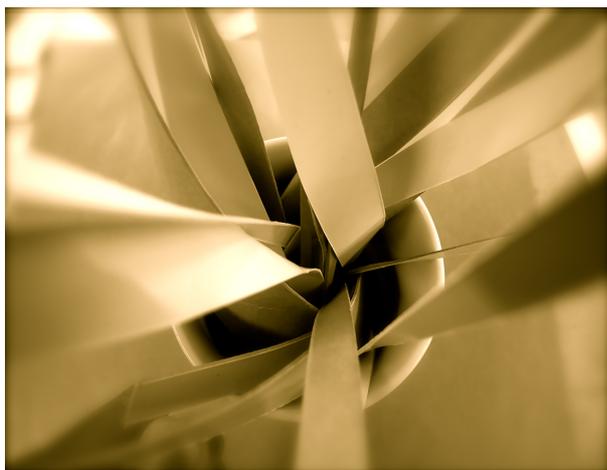
Possibility of plates

小早川 公貴 (指導教員 八尾 廣)

1 はじめに

現在、様々な交通機関が出現し『徒歩』という最も時間がかかり体力を消耗する行為は歩道という狭小空間に押し込まれ、流れる作用が強くとまらう空間になっています。これにより人の溜まり空間は建物内部に頼るしかなくなる現状です。さらに物流が多く交通する幹線道路に注目すると、グリーンベルト（中央分離帯）という都市の隙間が目につきました。

このような都市の隙間や道において多様な人々が利用する溜まりと流れの共同空間を設計していきます。そしてプレートというシンプルな部材だからこそ土地や空間に対しフレキシブルに対応することができるのではないかと考えました。



ひねられたプレートの集合

2 機能のグラデーション

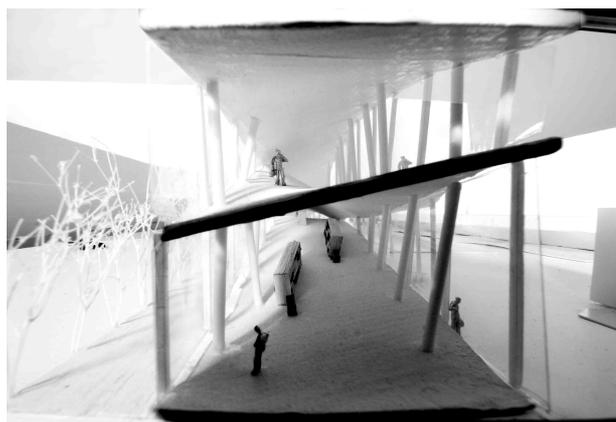
建物とは基本的にいくつかの部材の形態と機能が集まり空間やカタチが形成されています。

その分かれた機能を一つのプレートに収束させることで、部材が連続した一つの形態となり「ひねられた建築空間」をつくりだします。

プレートとは単なる床や壁などではなく、緩やかに機能が移り変わる空間装置として設計し、

さらに、いくつかのプレートが絡み合うことで内部と外部が次々に移り変わり内部の用途も変化していき

ます。帯状の部材をひねりや貫入などの操作し空間形成することで一通のベクトルの動線、視線を様々な方向へ変えることができます。



開かれた何となくの空間性

3 設計概要

3-1 敷地選定

計画地：神奈川県横浜市西区国際大通り

計画内容：公共複合施設兼ペDESTリアンデッキ
敷地説明：埋め立て地という超人工空間、グリッドで整備された街区そこに現れる巨大建築物群の間、すなわち都市の隙間と道をピックアップした。

3-2 車と人

現在国際大通りの地下には臨港幹線道路というトンネルが計画中で、トンネル自体貫通はしているにもかかわらず市の経済面から使用を見送られ続けている。本計画はトンネルで車を上下に分断、中央分離帯を敷地の一部として変換、道路をボンエルフ化しバス等の公共交通が主な道路機能にします。



ボンエルフ化した横浜国際大通り

3-3 イベント

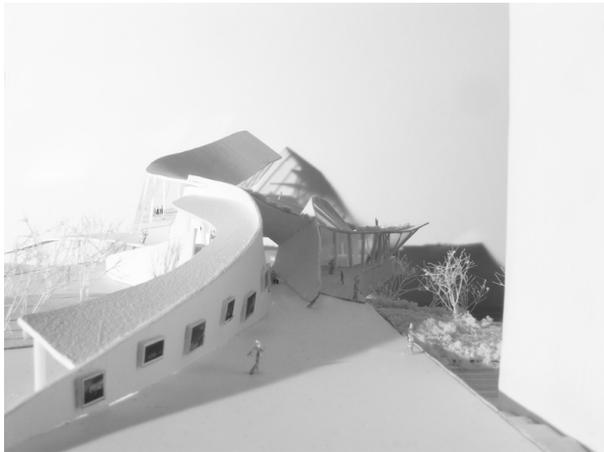
みなとみらい地区には巨大公共建築や公園などが立ち並び、そこで毎月様々なイベントを催しています。

そのような情報やその空間へ行くアプローチをこの空間で発信、誘導するように設計します。

4 コンセプト

4-1 道と建物を同じように設計できないか？

建築機能を一連の流れで解く。ひねりにより屋根のような、壁のような、床のような、緩やかに遮りながら、緩やかに繋ぐプレート、方向性を与えることにより人は進むべき方向を定め、その先へ行く為に板の乗り換えや隙間を縫って目的地に向かいます。その道中にみなとみらいのイベント情報や自然要素、コミュニケーション要素を付加し歩いている中で仲間意識を芽生えさせることにより道空間と建物空間を合わせます。



4-2 道でのコミュニケーションとは？

都市の道で歩いている時人との交流はほぼ無いに等しいでしょう。

しかし、山道歩いている時はすれ違う人や行き交う人、休憩している人に挨拶や会話が生まれてもおかしくありません。それは目標を同じくしていることと先の見えない何となくの空間性があるからだと考えます。

その目標をみなとみらいでのイベント、空間性を連続するひねり空間に置き換えることによりこの建築を歩く時はそういった仲間意識のようなコミュニケーションが生まれると思いました。

5 おわりに

断絶され開口が開いた空間とは違い、ひねりによる空間は緩やかな空間性を持ち壁、床、天井の先がシー

クエンスで見え隠れしていく様を表現できるので、移動空間等では動きによる空間変化を体験できる。緩やかに遮り緩やかに繋ぐことで都市に流動性を与え、道端の会話、景色を楽しむ、ちょっとした休憩などの、誰もが利用可能なコミュニティー空間としての存在となっていきます。

